

第3学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「短歌を楽しもう」 教材名「短歌を楽しもう」

2 単元の目標

文語調の文章の響きやリズムに親しんで音読できる。文章から想像した様子や感じたことを言葉を根拠にまとめ、友達と伝え合える。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①文語調の文章の響きやリズムに親しんで音読している。（〔知識及び技能〕(3)ア）	①「読むこと」において、文章から想像した様子や感じたことを言葉を根拠にまとめ、友達と伝え合っている。（C(1)オ）	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

短歌を声に出して読み、言葉の響きやリズムと情景を結び付けて楽しむ。音数を数えることだけで終えず、語の意味も確かめる。学習指導要領のC(1)オを中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(3)アを、言語活動の中で確かめる。年間計画の重点は知識・技能であり、本案ではそれを使う言語活動の関連項目としてC(1)オを加えている。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

教師が教科書の実際の文章を範読し、意味を確かめる必要のある語だけを補う。配布物には本文を転載せず、児童は自分の教科書で区切りの候補を確かめる。本時は短歌を対象を絞る。古い言い方は必要な語だけ意味を補い、書かれていない作者の体験は推測で補わない。おおむね満足できる状況は、文章から想像した様子や感じたことを言葉を根拠にまとめ、友達と伝え合っているという姿で捉える。語句や本文を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全1時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1 （本 時）	○範読を聞いて言葉の響きを確かめる。必要な語の意味と情景を話す。区切りや強弱を変えて読む。伝わった様子と読み方の関係を比べる。	知①・思①（発言・学習記録）



6 本時の指導 (1/1)

(1) 本時の目標

文章から想像した様子や感じたことを言葉を根拠にまとめ、友達と伝え合える。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・ 予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	使う教材を確かめ、今日比べる言葉や表現への自分の考えを短く書く。 ○「どこで区切り、どの言葉を響かせると、様子が伝わりますか」 【めあて】短歌を声に出して読み、言葉の響きやリズムと情景を結び付けて楽しむ。 〈予想される児童の反応〉 ・ 同じ速さで読むより区切りがあると聞きやすい。	本時に考える対象を確認し、既に分かったことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「どこで区切り、どの言葉を響かせると、様子が伝わりますか」 自分で言葉や本文の箇所を確かめ、理由を添えて考えを書く。ノートを見せて説明し、聞き手は分かったところと、まだ確かめたいところを返す。全体では考えが分かれた箇所を取り上げ、何を根拠にしたかを比べる。 選んだ言葉の響きが伝わるよう、区切りや間を変えて音読み、聞き手が感じた様子を伝える。読む前後の感想を比べ、音読して気付いたことをメモに足す。 〈予想される児童の反応〉 ・ 同じ速さで読むより区切りがあると聞きやすい。 ・ 今とは違う言い方でも景色が浮かぶ。 ・ 友達の読み方では別の言葉が印象に残った。	教師が教科書の実際の文章を範読み、意味を確かめる必要のある語だけを補う。配布物には本文を転載せず、児童は自分の教科書で区切りの候補を確かめる。本時は短歌に対象を絞る。古い言い方は必要な語だけ意味を補い、書かれていない作者の体験は推測で補わない。 想定するつまずき：音数を数えるだけで情景を考えない、意味不明のまま音だけをまねる。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 文章から想像した様子や感じたことを言葉を根拠にまとめ、友達と伝え合っている。(発言と学習記録) ◎知① 文語調の文章の響きやリズムに親しんで音読している。(〔知識及び技能〕(3)ア) (使った言葉・音読や表記の確認)

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
まとめ （ 分）	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって分かったことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・ 友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・ 友達の読み方では別の言葉が印象に残った。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った具体的な言葉を入れる。書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って紹介や説明の文章を直す。 ◎態①（学習前後の記録と、見直した理由）

（３）板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に題名と本時のめあて。その左に問い「どこで区切り、どの言葉を響かせると、様子が伝わりますか」。中央は根拠となる言葉・本文の箇所と、そこから考えたことを上下に対応させる。根拠の本文は先生が教科書から書き入れる。中央から左に児童の考えを並べ、同じところを囲み、違いの理由を線で結ぶ。左端に、本時で確かめた具体的な言葉を含むまとめと、考えを見直した理由を書く欄を置く。縦書きで右から左へ学習の順をたどれるようにする。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
 みえ先生ラボ



AI三重